

■藤田伝三郎 西南戦争で巨利挙げ(藤田組)創始、大阪財界主導して“東の渋沢”になるも、扱いは政商のまま。
ふじたでんざぶろう
天保改革始・1841＝ 長門国萩で、古代の外交官小野妹子をルーツとし、武蔵国藤田の主を経て周防に移住して酒造業を始めた藤田家末裔で、萩の酒造家を継いだ藤田半右衛門の四男に生まれる。

阿部正弘首座1845＝ 4歳： 維新の志士らが次々と誕生してくる環境のなか、勉学熱心で厳格な父のもと、幼いときから郷塾で漢学を学ぶ一方、稀に見るほど世故にたけて信仰心も厚い母から深い影響を受けて育つ。

国定忠治疎・1850＝ 9歳： 家業の酒造に携わり、

ペリー来航・1853＝12歳： 松下村塾・・・1856＝15歳：父の弟が分家して始めた醤油醸造業が遺児まで夭折して絶えてしまったため、父の命でその再興行ったのが最初の事業で、

安政の大獄・1859＝18歳：目的を達成した直後、父が死去してしまうと、
桜田門外変・1860＝19歳： 尊攘運動の刺激をうけ、山口に出て高杉晋作に師事、

禁門の変・・・1864＝23歳： ついに家業を投打って京都に上り、奇兵隊に参加して、長州藩志士とともに国事に奔走。

大政奉還・・・1867＝26歳： 新政府が生まれるも、功績が認められず、不満のあまり隊を離脱し放蕩、無一物になった上眼病を患って、有馬温泉の按摩となる。その客となった中野梧一と親密になり、また萩の先輩木戸孝允の言に発奮、

明治維新・・・1868＝27歳：この前には結婚。く明治維新後、再び実業家を志し、大阪の豪商大賀幾助方に奉公後、
戊辰戦争終・1869＝28歳：長男が誕生。長州の陸軍廃止で不要になった軍需品の払い下げを一手に引受けて大阪に搬送し、売却。それを資金に渡欧を志すも、萩の先輩兵部省大丞山田顕義から軍靴の製造の話聞くや、早速店舗を開き工場を建設以後、大阪に腰を据えて事業を展開して行くことになる。

初の日刊新聞1870＝29歳：離婚し再婚、以後2男を儲ける。大阪府依頼で、鋼鉄製としては三番目となる高麗橋を施工、母が大阪に派遣してきた2人の兄鹿太郎・久原庄三郎の参画も得ることになり、

明治6年政変 1873＝32歳：*鉄道当局依頼で、大坂～京都間の鉄道建設を請負い、ゼネコンの嚆矢となる。
佐賀の乱・・・1874＝33歳：ようやく帰省した際に母が死去。先収会社設立した井上馨の懇請で、大阪先収会社に入社し、
初の民間工場1875＝34歳：吉富簡一の後を受けて、その頭取になるが、江華島事件で井上が政界復帰したのに合わせ退社するも、
三つの内乱・1876＝35歳：井上の命で先収会社を引継ぎ、中野梧一を引取った上、藤田一族への井上の介入を許すはめになるなか、ドイツ人技師を迎えて、製革工場を建設し(藤田製革所)を設立、

西南戦争・・・1877＝36歳：*鉄道完成。く西南戦争となるや兵帖部御用をつとめ、軍需物資の調達にあたり、一躍大富豪となり、
大久保暗殺・1878＝37歳：日本人技術者のみによる初の鉄道工事(京都～大津)も請負う。豪奢な新本店ビルを建設し(藤田伝三郎商店)とする。大阪商法会議所設立にも参加するが、出世を阻止しようとする勢力の陰謀から、
琉球処分・・・1879＝38歳：贗札事件の嫌疑をうけ、中野梧一とともに捕えられるも、一切弁解せず、讒言であったことが判明して、
・・・・・・1880＝39歳：無罪になると、愛媛県市ノ川鉱山の経営に乗出し、大阪硫酸製造会社を設立。大阪商業講習所の設立にも寄与するが、この年早くも「藤田伝三郎始終録」が出版され、これは発禁になるものの、

明治14年政変1881＝40歳：大阪築港事業の計画にも乗出すが、地方制度改革により自らの事業には成らず。兄の鹿太郎・久原庄三郎と3人による(藤田組)に改組して頭取となる。以後、自らはほとんど引籠りながら、

新体詩抄・・・1882＝41歳：太湖汽船設立以降、大阪紡績・阪堺鉄道・神戸栈橋など諸会社の創立に参与、
岩倉具視没・1883＝42歳：この年、中野梧一が謎の自殺。
秩父事件・・・1884＝43歳：秋田県小坂鉱山の払い下げを受ける。
内閣発足・・・1885＝44歳：*五代友厚が死去した後を受けて、大阪商法会議所会頭となり、大阪財界の指導的地位を占める。この年、鉱山資本として毛利家から融資受けるなどしたこともあってか、当局からの要請で、

帝国大学始・1886＝45歳：本山彦一が支配人入社。大倉組と共同で、琵琶湖疏水工事・佐世保と呉の軍港・大阪の天神橋を請負い、
国民之友始・1887＝46歳：この四大工事進行中に建設部門を大倉組と合併、日本初の法人ゼネコン(有限責任日本土木会社)が発足、土木では月島埋立て・東海道線など、建築では帝国ホテル・歌舞伎座など、主要工事を独占して行く。軍需部門も大倉組と合併して(有限責任内外用達会社)を設立。(藤田組)としては鉱山事業に集中する一方、

初の対等条約1888＝47歳：鉄道事業にはなお情熱を注いで、山陽鉄道設立を実現し、児島湾干拓事業に独力で乗出すが、身体不調だったこともあって、大阪商法会議所会頭を辞任、干拓事業は支配人本山彦一に任せきりとなる。

帝国憲法発布1889＝48歳：毛利家家令と井上馨を案内方々、初めて小坂鉱山を訪れる。優れたアンチモニーを産出して業者が殺到した市ノ川鉱山は、政府によって(藤田組)に一本化が図られるも地元民と紛糾し、返上に至る。小坂鉱山もピークが過ぎて金詰り、(日本土木会社)(内外用達会社)の持ち分全てを大倉組に譲渡するが、

帝国議会始・1890＝49歳：日本初の経済恐慌に見舞われて、返済が滞り、株取引の失敗や家政取締りの不備もあって、
足尾鉾毒始・1891＝50歳：追加融資を受ける一方、(森本組)から久原房之助を引抜いて小坂鉱山に送り込み、
大本教・・・1892＝51歳：松林伯円講演録「藤田全盛鑑」、
郡司千島探検1893＝52歳：(藤田組)の組織を合名会社とし、頭取から社長に改称。以後も諸企業の創設に関与、

日清戦争始・1894＝53歳：
日清戦争終・1895＝54歳：最後の小坂鉱山視察。
白馬会・・・1896＝55歳：長兄鹿太郎が死去。毛利家からさらに追加融資を受けるも経営危機に陥り、実権を整理委員会に委ね、
八幡製鉄始・1897＝56歳：自ら支持してきた金本位制が施行されて一層苦境に陥るなか、久原の努力で新たな精錬法が開発され、
子規句歌革新1898＝57歳：住民の反対運動もあって延び延びになっていた児島湾干拓事業が許可されて、ようやく着工、
ピアノ国産化・1900＝57歳：松林伯円講演録「藤田伝三郎伝」など、反長州閥への世論を受けて、在世中から貶めるような伝記本によって、黒い政商のイメージが形成される。久原を所長にして、新精錬所を建設、

日比谷公園・1903＝62歳：産銅量で古河の足尾に繼ぐに至って、整理委員会から経営の実権を取り戻し、

日露戦争始・1904＝63歳：
日露戦争終・1905＝64歳：兄鹿太郎・久原庄三郎を継いだそれぞれの長男の持分を回収し、(藤田組)を自らと実子3人を出資社員とする組織に改めるに当たり、久原が退社、彼を慕う有力社員も次々退社して苦境に陥るも、病院や劇場まで建設して鉱山町の整備しながら、亜鉛鉱業・台湾の林業経営などにも進出、

韓国反日暴動1907＝66歳：児島湾干拓の一部が完成し、日本初の直営機械化農場がスタートさせ、
アラビヤ創刊・1908＝67歳：小坂が県下2位の都市となり、秋田鉱山学校計画に協力して実現させるなどして、
大逆事件判決1911＝70歳：男爵を授けられたが、
明治天皇没・1912＝71歳：没した。没後も「立志談叢・藤田伝三郎」など出版され、黒い政商のイメージが消えないままとなる。

砂川幸雄「藤田伝三郎の雄渾なる生涯」、邦永史郎「豪商物語」、「没年日本史人物事典」、「目でみる日本人物百科」、